

校長室の窓から

素人が語る JAZZ カルテットのお話

今回は、好きな音楽のお話から。

高校生で JAZZ にはまり、人生で最初に行ったコンサートは、アート・ペッパー（知ってます?）。島根県民会館で、18歳の時でした。



開場を待って並んでいるとき、いかにも老紳士という感じで、内ポケットからパイプでも出てくるんじゃないかと期待させるようなおじさんや、ちょっと寝かせた洋酒のような淑女の皆さんの中で、高校の学生服を着て立っていると、けっころジロジロと見られ、というより、少し周囲に距離を取られ（ソーシャルディスタンス・・・なわけない）、とても場違いな感じてした。

演奏は、アルトサックスのアート・ペッパーを中心に、ピアノ、ベース、ドラムスというカルテットだったと思います。とってもシンプルな構成で、とにかくサックスの演奏がダイレクトに心に伝わってきました。

多分、音楽をやっている人にとっては当たり前のことなんだと思いますが、たった4種類の楽器で、こんなにも深い感動の世界が創れることにとても驚きました。

当時アート・ペッパーは65歳。67歳で亡くなる2年前の演奏でした。



OECD（経済協力開発機構）が世界186カ国を対象に行った調査によると、「親や先生を尊敬していますか?」という回答に対して、「尊敬している」と答えた生徒の割合は、

1位	韓国	89.5%
2位	中国	86.9%
世界平均		70.7%
最下位（186位）	日本	25.2%

ちなみに、この数字が50%を切ると、その国は亡ぶと言われているそうです。その真偽は定かではありませんが、確かに、親や先生が尊敬できないなら、教育は機能しない。教育が機能しなければ国が荒廃する。これは間違いありません。

ここ数百年、日本が高い国力を維持してこられたのは、中世以降世界屈指の教育を持っていたからだということ、国内外の衆目が一致する見解だと思います。しかし今、どうもそれが瀕死の危機。

OECD のもう一つの調査（TALIS2018）によると、日本の中学校教員で週60時間以上働いている人は56.7%で世界一。ちなみに、アメリカは22.2%。韓国は7.8%、フランスは2.6%。

日本だけ突出して時間外労働が多い。

さらに、労働時間に占める授業時間の割合は、イギリスで6割、韓国が7割、アメリカが8割、南米諸国では9割。

そして日本は46.2%。つまり、わが国の中学校教員は、本務である授業以外の仕事で忙しい。という痛い状況が明るみに出たわけです。

この調査結果は、ニュースやネットで大きく報じられ、教員の働き方改革や学校のICT化によるペーパーレス推進、そしてICT教育の推進へとつながってきました。

確かに、働き方改革やICT教育は最低限必要な事柄。それはOECDの分析とは関係なく、世界に追いつくために必要なこと。でも、それを梃子にして、親や教師への敬意を取り戻し、教員の労働環境を改善しようとするのは、ちょっとお門違い。

だって、サックス奏者として劇場の舞台上に上げられていながら、左足でスネアを叩き、合間にピアノを弾いているのが日本の教師（教育）の姿なわけで、それは劇場演奏ではなくみごとな大道芸。その大道芸を、サックス奏者として評価されるのだから、まさにお門違い。そんな日本の教師（教育）の姿に、異変を感じなかった私たち教育界を含む日本人全体の感性や価値観が、そもそもの問題なんじゃないのかと感じます。業務効率化やICTという対症療法で、本質的問題である価値観は変えられない。

いったい私たちは、どうして、他人に敬意を払う能力や他人の意図を推し量る能力が弱くなってしまったのか。どうして、自己中心的な言動で他人を傷つけ、人様の問題に首を突っ込んで誹謗中傷し、愉悦を感じるようになってしまったのか。どうして、自己の役割や責任の範囲を自覚する能力が弱くなって、やたらと他人のせいにするようになってしまったのか。

そんな憂いと反省の中であって、頓原中学校は、フロントリズムが、阿吽の呼吸で出たり入ったりする音楽を奏でたい。そのために磨きあいたと思う、梅雨のころです。